

## 英語の未来表現

内 藤 永

### 1. はじめに

日常繰り広げられる簡単な会話を観察すると、未来の事柄を述べる場面が書き言葉に比べて多いように思える。英会話においても同様で、近い未来の予定、計画などを質疑応答する場面が多く見受けられる。その未来に関するやり取りをする際に表現方法に多少の誤りがあったとしても、たいいていの場合おおよその意味を把握する上では何ら支障がない。ところが、細部について情報交換をするとなると、相手にその意図を正確に伝えるのは非常に難しくなる。これは英会話に限ったことではなく、外国人と日本語で会話する際にも、細部について話し手の意図することを正確に理解するのは容易ではない。

未来表現の語法について少し厚めの文法書を紐解くと、未来表現には実に多種多様な形があり、その用法もかなり複雑難解なものとなっている。にもかかわらず、中学校レベルの教科書や参考書には、未来を表現するためには「助動詞 will+原形」を使うこと。be going to という用法もあるが、be going to は will とイコールの関係にあり、どちらを使ってもほぼ同じ未来表現になる、という極めて大雑把な記述がされている。多少親切な参考書では、be going to は近い未来を表す用法であることを簡単に説明しているが、初期段階の学習者の混乱を避けるためか詳細には立ち入っていない。

中学校でそのような学習効果があるためか、日本人の話す英語を聞くと、未来に関する表現をするときには will の多用が見受けられる。例えば、夏休みを目前にした、外国人と日本人学生の間で次のようなやりとりがあった。

外国人：Do you have any plans for this summer vacation?

学 生：Yes, yes. I will go to Europe.

外国人には十分に意味が伝わらなかったようで、学生に聞き返したが、次の学生の返事に困惑の表情を一層深めた。

外国人：Oh, you are going to Europe this summer. Right?

学 生：Yes, yes. I will go to Europe.

また、別な学生からは、自分の予定を外国人に伝えようとしたがどうしても理解してもらえないので、どう表現したらいいのかという質問を受けたことがある。状況を説明させると、学生はもう既に詳細が決められた予定を伝えるために、I will～という表現を使っていたようである。

これらの例は、will が漠然とした推測や意志を表すという基本的な意味を持つことを知らずに、そのまま will を用いて具体的予定について説明したことに問題がある。ここでは、しばしば表現に苦勞するこれら未来に起こる出来事の細部について記述し、特に各表現間に見られる微妙な意味的違いにつ

いて論じる。未来表現は実に数多くあるので、ここでの記述の対象は比較的日常頻繁に使われる表現に絞ることにする。次節では、未来の事柄を表現する文法形式そのものについて概観し、3節以降で未来表現の用法を具体的に記述していく。

## 2. 未来を表す形式

未来の表現の取り扱いが難しい理由はいくつかあるが、まず第一に、未来を示すための一定の形がないことがあげられる。現在に起きている出来事、動作、状態を表すために現在形(現在時制)、そして過去に起きた事柄について表すために過去形(過去時制)と、現在、過去については、それぞれ文法範疇が存在するが、接辞形態を考慮した場合、未来の事柄を表すための未来形(未来時制)という文法範疇は存在しない。例えば、不定詞 work は、現在時制として work、過去時制として worked と屈折変化するように、接辞-ed を付加することによって現在と過去が区別される。それに対して、未来については学校文法で学習するように、will という助動詞を用いる迂言法によって、will work として未来の事柄を表す。このように、時制を語形変化に限ると、未来を表す接辞は存在しない。フランス語のように単純未来を表す形態素がある言語も存在するが、残念ながら英語の未来時制についてはそのような形態素が発達していない。

未来表現が複雑である要因は、さらに表現そのものが持つ意味的特性にもある。未来の出来事、動作、状態を述べる場合、現在、過去とは異なり、その事象の実現については不確定要素が多分にあり、不確実性が常に含意されるという特性がある。未来の事柄について述べたとき、話し手は何らかの予測に基づいて陳述を行う。したがって、未来表現をする際には、必然的推測という法的意味合い(modal meaning)がどうしても伴うことになる。

前節で取り上げた未来表現 will が英語学習の初期段階で未来を表す典型的な形として教えられるのも、それが英語の中では比較的無色、中立な未来の事柄を表す、便利な表現であるからである。しかし、この will にさえ、推測、意志などの法的意味が常につきまとい、法的意味から独立させて未来を単純に表現することはできない。

他の法助動詞(modal auxiliaries)、例えば may、must が次のように未来を表せることから分かるように、未来と法的意味とは切り離すことのできない密接な関係にある。

The weather may improve tomorrow.

You must have dinner with us tonight.

以上のように、英語については、接辞形態見ても、助動詞などを付加して表現する迂言用法を見ても、純粹に未来だけを表現するための独立した形式が存在するわけでないことが明らかである。

事柄の実現について不確実性が常に付帯する性質がある以上、未来表現はどの言語でも法的意味合いが複雑に絡み合っていると考えられる。実際、多くの言語において、未来時制は形態的に一定した形式を持たず、様々な助動詞を用いて未来の事柄を表す。フランス語には未来を単純に示す形態素が存在すると述べたが、そのフランス語の単純未来でさえ、法的意味合いが複雑に絡み、細部について用法を記述することは非常に難しい。日本語についても、文法学者によって未だに議論がされていることから分かるが、未来の事柄を表す専用の形式は存在せず、ほとんどが推量、意志などの法的助動詞との密接な関係において未来表現がされる。したがって、言語を問わず、未来表現はその法的意味合いを区別しながら巧みに用いていく必要があり、未来の事柄を細部に渡り陳述するためにはこれらの用法を学習することは避けて通れない作業である。



### 3. 未来表現

英語には動詞の屈折変化を用いた未来時制は存在しないものの、未来の事柄を表すためには様々な迂言的用法がある。ここでは、その中から未来表現のために頻繁に使われる次の5つの用法について見ていくことにする (cf. Leech 1971)。\*1

- |                    |  |
|--------------------|--|
| 1. will+原形不定詞      | John <i>will arrive</i> tomorrow.        |
| 2. be going to+不定詞 | John <i>is going to arrive</i> tomorrow. |
| 3. 現在進行形           | John <i>is arriving</i> tomorrow.        |
| 4. 単純現在形           | John <i>arrives</i> tomorrow.            |
| 5. will+進行形        | John <i>will be arriving</i> tomorrow    |

上記の5つの表現は、副詞語句 tomorrow に示されているように、明日という未来時においてジョンが到着するという出来事について述べたものである。その基本的意味はいずれの文においても変わらないが、助動詞を用いる用法(1、5)、現在時制を用いる用法(2、3、4)などとその文法形式は異なる。この文法形式の違いが、それぞれの文のニュアンスを微妙に異なるものさせ、未来を推測する上での確信の度合い、また判断する基準がそれぞれ違う表現となっている。いずれも意味的に等価な文は存在せず、上述した be going to=will のような等式は成立していない。以下、それぞれの表現の文法的特徴、他の表現との微妙なニュアンスの違いについて細かく見ていくことにする。

#### 3.1 Will+原形不定詞の用法

助動詞 will/shall を歴史的に見ても、最初から未来の意味を持ち合わせていたわけではない。これらの助動詞は元々 will が願望・意志、shall が義務・必然を表すものであった。古英語においては未来時を表すための特別な形式はなく、現在形によって未来を表現するのが普通であった。will/shall が未来時を表すようになったのは、1400年以降、すなわち後期中英語以後のことであり、その後期中英語では、will よりも shall の方が頻繁に使われていた。その用法については17世紀以降の文法家たちによって規範文法という形にまとめられた。その規範文法の記述は用法がかなり複雑であるが、かなり簡略化して述べると、will は話し手が自分の意志に従って何かを行う意志未来を表し、shall はそのような意図を含まない単純に未来に起こるであろう出来事、動作、状態を述べる単純未来を表す。

現代英語では、単純未来を意味していた shall も will によって代用されるようになり、未来を表現する助動詞としては、will が日常的に使われるようになった。shall は、一部の国・地域を除けば、日常に使われることはほとんどなくなった。現在 shall が使われるとしても、主語が1人称で相手の意向を

\*1 その他の未来表現としては、未来のある時点で動作が完了しているか、すでに過去になったことを示す未来完了形、未来のある時点で動作が現在進行中であることを示す未来完了進行形、公式の予定などを示すことに多く用いられる be to、ごく近い未来を表す be about to などがある。

By the end of the next month, he will have finished his assignments.

(来月末までには、彼は課題を終えているでしょう)

By the end of the next spring, he will have been living here for thirty years.

(次の春で、彼はここに30年間住んでいたことになる)

OPEC representatives are to meet in Geneva next Tuesday.

(OPECの代表者は次の火曜日にジュネーブで会うことになっている)

Look! The train is about to start.

(あれっ、電車が発車しそうだ)

これらの表現は、実際には滅多に使用されないもの、意味が多義的ではなく、比較的用法が単純なものであるので、ここでは詳細には立ち入らない。

聞く使い方 (Shall I~?/Shall we~?) が主なもので、その他は、演説などで強い決意を表すとき、強い命令をするとき、規約・条項などの正式な文章を書くときなど特別な用法が残るのみである。ここでは、日常的に使われる助動詞 will の単純未来、意志未来の用法についてのみ詳しく見ていくことにする。

### 3.1.1 単純未来

助動詞 will の単純未来は、未来に起こる出来事、動作、状態について、話者の判断に基づいた何らかの予想、推測などを漠然と表すものである。

We will find him at the hotel. (ホテルに行けば彼がいるでしょう)

You will get better soon. (すぐによくなるでしょう)

He will be glad to hear that. (それを聞いて彼は喜ぶでしょう)

この単純未来では、上の文からも分かるが、時を定める副詞は必ずしも必要とは限らないが、場合によっては副詞がないと文が意味的に成立しないときがある。

\*It will rain.

It will rain tomorrow.

この文は、副詞がないと「いつの日か雨が降る」という意味の文になるが、その陳述内容は通常だれから見ても当然のことであり、will によって担われる推測の意味と矛盾することになる。したがって、この種の文を述べる場合、tomorrow のような時を表す副詞類を挿入し、陳述する未来の時を一定期間定めて推測をするという形を取らなければならない。

will の単純未来としての用法は、この他には、正式な行事予定を案内するとき、あるいは、天気予報などで用いられる。

The wedding will take place at the church on June 27th.

(結婚式は6月27日に教会で行われます)

The fog will persist in all areas.

(霧は全地域に残るでしょう)

### 3.1.2 意志未来

助動詞 will の意志未来は、基本的にあらかじめ考えたものではない単なる意志を表す。この意志を表す用法は、肯定文において通例主語は1人称に限られ、2人称、3人称で用いられた will は単純未来を表す。これは、単純未来では文の内容について推測をするが話者であるのに対し、意志未来では意志の担い手は話者ではなく、文中主語にあるためである。

I'll see you next month. (来月お会いしましょう)

John, you will sit on this side. (ジョン。こちら側に座ってください)

主語が最初の文のように1人称の場合、文中の主語と話者は同一なので、話者は文中の内容を自らの意志として述べるのが可能である。一方、主語が二つ目の文のように2人称の場合、文中の内容について意志を述べるのは文中主語になり、話者は述べることに自らの判断を下すことはできない。したがって、このような主語が2人称、3人称の文は、主語の意志を立てることで、穏やかな命令、押しつけがましくない依頼など、特別な意味を表すことになる。

ただし、主語2人称や3人称でも次のような用法では頻繁に使われる。

Will you lend me your car? (車を貸してくれませんか)



He won't resign. (彼はどうしても辞めようとしなない)

意志未来では、主語がその意志の担い手であるから、最初の文のように2人称で疑問文になった場合、相手の意志を尋ねる、丁寧な表現となる。<sup>\*2</sup> また、意志未来は二つ目の文のように否定にすることも可能だが、この場合は強い拒絶を意味する。

冒頭に、意志未来はあらかじめ考えたものではない意志を表すと述べたが、意志未来では、次のようにある状況の結果生じた意志を表す文がよく使われる。

A: I can't open this can. (この缶開かないよ)

B: I'll do it for you. (開けてあげるよ)

この文で話者Bが缶を開けるという動作を決めたのは、Aが缶を開けることが出来ないと分かった瞬間であって、あらかじめ考えていた結果の行為ではない。このように、ある状況の下で、瞬間的に物事を決めた場合、意志未来としての will が頻繁に使われる。

ここまで、単純未来と意志未来の意味と用法を見たが、その区別がはっきりとしない文もある。例えば、He won't do his homework. という文は、話者の推測（単純未来）として「彼は宿題をしないでしょう」という意味と、主語の意志（意志未来）として「彼は宿題をしようとしなない」の二つの意味がある。意志未来の場合、人間など意志を持つことができるものだけが主語になれる。動詞についても主語の意志によってコントロールできるものだけに限定される。このように意志未来については判別する手がかりが多少あるが、単純未来と意志未来との明確な区別は、基本的に文脈や状況から判断しなければならない。

### 3.2 Be going to+不定詞

be going to は、助動詞 will とともに日常的に頻繁に使われる大切な未来表現であり、大きく分けて二つの意味がある。一つは、「～しそうだ」という話し手の主観的な予測を示す用法（予測未来）、もう一つは、主語の意図、計画などを表す用法（意図未来）である。will の単純未来、意志未来と意味的にかなり似ているので、will と be going to のニュアンスの違いははっきりさせることが重要である。両者の用法を比較対照しながら、細かくその特性を見ていく。

#### 3.2.1 予測未来

be going to の予測未来としての用法は、発話時にある出来事が起きる兆候、要因が既に現在発現し、その出来事の実現可能性が高く、しかもその出来事が近い未来に起きることを示す。形態的には be 動詞が現在時制の形をとることからも分かるように、ある意味で現在起きている出来事の延長線上で未来にその出来事が成就するのを予想していると言える。

She's going to have another baby. (彼女はもう一人赤ちゃんを出産する)

I think I'm going to faint. (ぼくは気絶しそうだ)

There's going to be a storm in a minute. (すぐ嵐がやってくる)

これらの文は、それぞれ「彼女が妊娠している」、「ぼくは今具合が悪い」、「雨雲が向こうに見える」など、文中で予測されている出来事の兆候、要因は、現在の時点で既に観察されていることを含意する。

<sup>\*2</sup> この丁寧な表現が転じて、次のように、店員などがお釣りを出す場合などにも、will が用いられる。

That will be ten dollars. (10ドルになります)

これらの基本的な意味特性を踏まえて、単純未来 will と予測未来 be going to のニュアンスの違いを比較検討してみよう。

He will get better soon.

He is going to get better.

最初の文は、話者の単なる推測で「そのうちによくなるでしょう」と述べているのにすぎず、その発言に根拠はあまりなく、話者は彼がよくなるという未来の状態に対する確信の度合いも低い。それに対して、二つ目の文では、「病状が改善したから」など、良くなる兆候が既に現時点で観察され、話者がそのような未来の状態が近いうちに実現するという確信を持っているというニュアンスがある。

このような will と be going to の意味特性の違いから、副詞相当語句の付加、条件節での振る舞いなど、いくつかの点で統語的特性も両者は異なる。単純未来 will の場合、3.1.1 節で述べたように時を定める副詞句がないと意味的に矛盾が起こり、陳述として成立しない文があった。しかし、予測未来 be going to の場合、その実現が近い未来であるという意味特性を元来持っているため、下に示したように副詞相当語句がなくても構わない。副詞句がないときには、その文は It's going to rain soon. のように解釈される。

\*It will rain.

It's going to rain.

We're going to live in the country when we retire.

もし、実現を確信しているが、すぐ近くではない未来に起きることを述べる場合は、三番目の文のように時を表す副詞相当語句を付加することによって表現することが可能である。

条件節を含む下のような文では、主節で be going to を用いることは不可能であり、will が用いられるのが通常の用法である。これは、条件節の内容が現在ある出来事ではないため、現在ある兆候が前提となっている be going to は使えないためである。will の場合は、現在とは切り離して、未来の出来事を漠然と推測する場合に用いられるので、このような文の主節に典型的に現れる。

\*If you accept that job, you're never going to regret it.

If you accept that job, you'll never regret it.

ところで、予測未来については、ある出来事の予測が話し手の確信に基づいていることを簡単に述べたが、注意しなければならないのは、その予測が実現することを保証するものではないことである。

The car was going to crash, but with the last wrench of the wheel I brought it to safety.

(車が衝突しそうになったが、ハンドルを切って無事だった)

この文は、「車がスリップし、対向車線にはみ出した」などの要因があり、「車が衝突する」と予測したが、実際はハンドルを切ったお陰で衝突には至らなかった、と言う意味であり、車が衝突するという予測が実現しなかったことを表している。

### 3.2.2 意図未来

意図未来は、ただ単に主語の意図を表すのではなく、準備などを前提とした未来の行動を表すもので、ある程度計画性があり、実現の見込みがある場合に使われる。予測未来と同様に現在ある出来事、状態の延長線上として、何らかの意図を述べる用法である。次の文を比較してみよう。

I'm going to buy a bicycle.

I'll buy a bicycle.

最初の文の場合、自転車を買うために必要なお金を準備して、「ぼくは自転車を買うつもりです」とい



うニュアンスがある。それに対して、後者の場合は、未だにお金は貯まっていないが、「ぼくはいつの日か自転車を買いたい」という意志の表明で、計画性があるとは限らず、思いつきというニュアンスがある。

この意志未来が持つ、計画性のない、思いつきの意味特性は、3.1.2 節で述べたように、瞬間的に何かを決定するときには生かされる。例えば、ある場面で電話が突然鳴り、話者が電話に出る意志を表したいときは、be going to ではなく、will が使われる。

\*I'm going to answer it

I'll answer it.

be going to はあらかじめ計画された未来を表すので、突然の電話に対して応える場合には使うことができない。<sup>\*3</sup> このように場面ごとに、それぞれの用法の特性を生かして、微妙なニュアンスを伝えていくことができる。

ところで、第1節では、Do you have any plans for this summer? という問いに対して、I will go to Europe. と返答するのが会話に混乱を生じさせる原因となったことを指摘した。混乱の理由は、その返答には「いつかわからないけどヨーロッパに行くでしょう」というニュアンスがあり、「(今夏は)ヨーロッパに行く予定です」という意味にはならないからである。夏休みが近い現在、ヨーロッパに行くには、パスポートを取得する、航空券を購入するなどの、ある程度の準備行動が必要である。つまり、この場面では、現在進行中の準備の延長線上に旅行が実現することを確信した、I'm going to trip to Europe (this summer). のように表現するのが適切なのである。

be going to と will の統語上の違いを見ると、意志未来 will の場合、通常の用法は主語が1人称に限られていたのに対して、意図未来 be going to の場合、すべての人称に用いることができるという特性がある。このため、主語が2人称、3人称で、何らかの意図を表す場合は、通例 be going to が使われることになる。

Bill is going to be a doctor when he grows up.

(ビルは大きくなったら医者になるつもりです)

ただし、この文において、意図の担い手は、あくまでも文中主語の Bill であり、話者はその Bill の意図を知った上でこのような発言をしたという意味になる。

この節の最後に、未来についてある意図を表明する場合に、intend to, plan to という表現もあるが、be going to とのニュアンスの違いについても触れておこう。

He is going to leave tomorrow.

He intends to leave tomorrow.

最初の文の場合、「彼は明日出発するつもりだ」という意図未来と、「彼は明日出発するでしょう」という予測未来の二つの意味が生じる。このような多義性を避け、意図やもくろみを正確に表したい場合には、後者の intend to,あるいは plan to を使った方がいい。ただし、両者とも意図を表している場合、前者の be going to は、その計画が実現するという主語の強い期待が前提があり、強い意味を持つものに対し、後者 intend to は、出発が実際に行われるか否かについては語っていない弱い意味となる。

<sup>\*3</sup> しかし、ある人から電話が来るのがあらかじめ予定されていたが、たまたま料理の途中で、電話に出られなかった場合には、次のように使うことができる。

I was going to answer it, but I couldn't.

ここまでを簡単にまとめると、will は現在ある出来事と切り離れた、漠然とした推測や意志を表しているのに対し、be going to は、現在ある出来事の延長線上として、予測し、意図を陳述する用法である。

### 3.3 未来を表す現在進行形

現在進行形で表される未来表現は、未来時を定める副詞表現を伴い、発話時に既に取り決められたり、手配されている、ごく近い未来の事柄を表す。文中主語は、その取り決めや手配に関わり、事柄の実現を強く確信している人間が用いられる。したがって、未来を表す現在進行形では、次のような単なる予測や無生物主語は非文となる。

\*It is raining tomorrow. (cf. It is going to rain tomorrow.)

\*The sun is rising at 5 o'clock tomorrow. (cf. John is rising at 5 o'clock tomorrow.)

また、進行形という形式を取る以上、進行形にできない状態を表す動詞類については、この表現を使うことができず、単純未来の will が代用される。

\*Strawberries are being more expensive next week.

(cf. Strawberries will be more expensive next week.)

これまで見てきた二つの用法との意味的違いを具体例から考えてみよう。

She's getting married this spring.

この文は、彼女の結婚については、結婚相手との約束があり、式場などの手配が済んでいる、春に予定された出来事を述べている。もし、現在進行形ではなく、3.1.1 節の単純未来 will を用いた場合は、話者の単なる憶測や希望を述べたにすぎず、その結婚の計画は前提とはされていない。

She'll get married this spring.

次に、be going to の用法との比較であるが、3.2.3 節で既に見たように、計画性という点、そして文中主語が出来事の実現を確信し、期待している点では、現在進行形の用法と同じである。

She's going to get married this spring.

しかし、この文の場合、結婚するという計画はあったとしても、約束、手配などの現実性を高める要素に欠ける。まだ、具体的に式場が決定していなかったりなど、取り決めの部分が十分にされていないというニュアンスがある。

進行形、be going to の用法を疑問文にした場合には、次のような違いがある。

Are you dining with her next week?

Are you going to dine with her next week?

進行形の場合は、主語によって、取り決めが既になされたという含意があるので、話者の質問の焦点は、主語が来週彼女と食事に行くか、行かないかの事実を聞くことにある。一方、be going to の場合は、詳細な取り決めがなされていないが、計画はあるという含意があるので、質問の焦点は、主語が来週彼女と食事に行くつもりなのか、そうでないのか主語の意志を尋ねることにある。

現在進行形の用法とこれまで述べた二つの用法との意味的違いを簡単にまとめると、will は漠然とした意志、be going to は意図+計画、現在進行形は意図+計画+取り決めの未来表現ということになる。

### 3.4 未来を表す現在形

未来を表す現在形は、常に副詞相当語句が伴い、予定や計画などで、未来時に起こることがすでに



確定している事柄を表す場合に用いられる。よく知られた例は、カレンダーや、変更がない確定的予定を示すときである。

Tomorrow is Sunday. (明日は日曜日だ)  
 Summer time starts on April 15th. (夏時間は4月15日に始まる)  
 We start for China tonight. (今晚、私たちは中国に向けて出発する)

発話時に断定すべき根拠がなければ、現在形で未来時を表すことはできず、推測を示す will を用いなければならない。

The Yankees play the Red Sox tomorrow.  
 \*The Yankees play well tomorrow.  
 The Yankees will play well tomorrow.

最初の文は、ヤンキースとレッドソックスとの対戦の日程が決定し、変更がなく試合が明日行われることを意味する。しかし、ヤンキースが明日いいプレーをすかどにかは、試合を見てからでないと分からない。後に分かるプレーの良し悪しについては、二つ目の文のような表現は許されず、最後の文のように推測を示す will が使われる。

次に、確実性という意味では、未来を表す現在時制と近似する。現在進行形の用法と比較してみよう。

I'm starting for China tonight  
 I start for China tonight.

この二つの文は、主語が今夜中国に向けて出発するという計画が、手配済みで、確定しているものという点ではほぼ同じである。しかし、この二つの違いは、出来事の確実性にあるのではなく、その出来事の変更可能性にある。現在進行形の場合は、前節で述べたように、主語が自らの意志で手はずを整えたというニュアンスがある。つまり、本人が手配している以上、変更の余地は残されている。それに対して、現在形の場合は、その予定が本人ではなく、旅行会社のバック旅行など第三者によって決定されているために変更が不可能という意味合いを持つ。このように未来を表す現在形は、本人が決定したとは限らないことから、個人というよりも、公の機関によって取り決められた場面で用いられる。

その他の用法で未来を表す現在時制が使われるのは、if, whether, as long as, in case, unless などの語句で始まる条件節である。この場合は、単純未来の will を用いることはできない。

If it rains tomorrow, I will stay home.  
 I'll let you know as soon as I hear from her.

これらの文で、「雨が降る」のも、「彼女から連絡を受ける」のも、主語の意志によっては左右できない未来の出来事(単純未来)であるが、いずれも現在時制が用いられる。ここで will を用いた場合は非文になる。ただ、次の例文のように、if 節が単純未来ではなく、意志未来に用いられた場合は will の使用が許される。

If you will help me, we can finish early.

この文は、「もしきみがぼくを手伝ってくれるなら」という意志未来で使われているために、will の生起が可能である。

以上のように現在時制による未来表現は、これまでの三つの未来表現と異なり、その出来事が文中主語の意志とは関係なく行われたものであり、これまでの三つの未来表現以上に、その出来事の実現性が高く、確定的である。

### 3.5 Will/Shall+be+ing

最後に、will を伴った進行形、いわゆる未来進行形を見るが、この形式には大別して二つの用法がある。一つは、未来のある一定の時期に動作の進行を表すという、ごく普通の進行形の意味である。

This time next week I will be sailing across the Atlantic.

(来週の今頃、大西洋を渡っている)

It will be snowing when you wake up.

(目を覚ましたとき、雪が降っているでしょう)

もう一つの用法は、動作の進行という含意はなく、だれかの意図が含まれない出来事を表す場合に用いられる。

I'll be meeting Jane tomorrow evening.

この文では、ジェインと明日の晩会うことになったのは、自分の意志ではなく、成りゆき上そのようになるだろうという意味を表わしている。

だれかの意志、意図が含まれていないこの用法は、相手の計画について事実を確認するとき、相手に圧力をかけない丁寧な表現となる。

Will you be joining us for dinner? (夕食に来ることになっていますか)

主語の意図、あるいは推測を含意する場合は、will を単独で使う。

I'll meet Jane tomorrow evening.

この文は、「明日の晩ジェインと会うつもりだ」、あるいは「明日の晩ジェインに会うでしょう」と二つの意味を持つ。もし、主語に意図があることだけをしめすときは、次のように be going to を使う。

I'm going to meet Jane tomorrow evening.

このように、will を用いた未来進行形は、その予定された出来事が成りゆきによるもので、主語の意図によるものではない、未来の起こるであろう事実を述べた表現である。

## 4. まとめ

これまで見てきた5つの未来表現の用法をごく簡単にまとめると次のようになる。

will ————— 単なる推測、意志。

be going to —— 根拠ある予測、意図。

be -ing ————— 計画的意図。

現在形 ————— 確定的予定。

未来進行形 —— なりゆきの予定。

第2節で述べたように、英語に未来を表す独立した形式が存在しない以上、これらの微妙な意味的差異はどうしても学習しなければならない。これらを覚えなければ、will を用いて漠然と未来について述べるにとどまり、いつまでも細かい意図を伝えることができなくなる。ここでは、5つの未来表現の主な用法に絞って記述したが、これらの記述をいかに簡略化し、学習しやすい定式化を導き出すか、また英語学習者にとってこれらの意味的違いを習得困難にする要因は何であるか日英語の相違を踏まえた議論などが今後の研究課題として残る。

(文中の用例を引用した) 参考文献

Alexander, Louis G. (1988) *Longman English Grammar*, Longman.

Comrie, Bernard (1985) *Tense*, Cambridge University Press.



- Leech, Geoffrey N. (1971) *Meaning and the English Verb*, Longman.
- 村田勇三郎、成田圭市。(1996)「英語の文法」テイクオフ英語学シリーズ、大修館書店。
- 中島文雄。(1979)「英語発達史一改訂版」、岩波全書。
- 大塚高信、中島文雄編。(1982)「新英語学辞典」、研究社。
- Quirk, Randolph. *et al.* (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman.
- Swan, Michael. (1980) *Practical English Usage*, Oxford University Press.
- 田中春美編。(1988)「現代言語学辞典」、成美堂。
- 寺澤芳雄編 (1997)「英語語源辞典」、研究社。
- Thomson, A.J. & A.V. Martinet (1969) *A Practical English Grammar*, Oxford University Press.
- Ullian, Russell (1978) "The Nature of Future Tenses," *Universals of Human Language*, vol.3 Word Structure, Stanford University Press.
- 安井稔編。(1996)「コンサイス英文法辞典」、三省堂。